OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 西村天囚『欧米遊覧記』と御船綱手「欧山米水帖」：明治四十三年「世界一周会」の真実 |
| Author(s) | 湯浅, 邦弘 |
| Citation | 大阪大学大学院文学研究科紀要. 2021, 61, p. 1-45 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/81518 |
| rights | 本文中の画像は倉敷市立美術館の許諾を得て掲載しています。画像の転用はご遠慮ください。 |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 西村天囚『欧米遊覧記』と御船綱手「欧山米水帖」

## ―明治四十三年「世界一周会」の真実―

湯浅邦弘

### はじめに

旅の思い出は写真で、というのが一般的であろう。しかし、カメラがまだそれほど普及していなかった時代、絵画も有力なツールであった。

明治四十三年（一九一〇）、朝日新聞社が主催した第二回「世界一周会」では、特派員として参加した西村天囚が現地から紀行文を逐次送稿し、帰国後それをまとめて『欧米遊覧記』として刊行した。一方、この旅に参加した日本画家の御船綱手（みふねつなて）は、行く先々でスケッチに努め、帰国後、それを基に七十二枚の彩色画を描き上げて全三冊の画帖に仕立てた。

天囚と御船は上の写真にも一緒に写っている。これは、同年五月七日、米国のワシントン元大統領旧宅前で撮影された集合写真である。中列の中央向かってやや右寄り（後列のポーラーハットをかぶっている人の前）のひときわ大きい人物が西村天囚、その右後ろ（ハットの人の向かって右）にいるのが御船綱手である。

筆者は先に、西村天囚『欧米遊覧記』に基づいて、「総勢五十七名、百四日間」という大旅行の概要について紹介し、漢学者西村天囚が向き合った欧米世界とはどういうものであったのかについて基礎的な考察を行った。(1)

引き続き本稿では、天囚の『欧米遊覧記』を御船綱手の画帖と付き合わせることにより、世界一周会の実態に迫ることを目的とする。なお、筆者は中国古代思想史、漢文学を専門とする者であり、絵画については全くの素人である。よって、御船綱手が描いた彩色画については、美術的観点からの言及は一切避け、あくまで『欧米遊覧記』との関係から若干の考察を加えるものである。

## 一、世界一周会と御船綱手

御船綱手の経歴を倉敷市立美術館編『倉敷市立美術館―池田遙邨と郷土作家―』（日本文教出版・岡山文庫、二〇一一年）に依拠して紹介すると、以下のようになる。

御船綱手は、明治九年（一八七六）、渡邊欣兵衛の長男として岡山県窪屋郡倉敷村（現在の倉敷市）に生まれた。慶応元年（一八六五）生まれの西村天囚より十一歳年下ということになる。

その後、岡山の足守出身で郵船会社に勤めていた御船栄三郎の養子となった。十四歳の時、画家を志し、木村応春や渡辺祥益に学んだ後に上京して川端玉章に師事。明治二十九年、東京美術学校（東京芸大の前身）に編入してからは橋本雅邦の指導を受け、卒業後、大阪に移住した。世界一周会参加当時は大阪天王寺在住である。

『欧米遊覧記』によると、御船は世界一周会参加に際して朝日新聞社から「画報嘱託」の任を受け、この旅に十数冊の書画帖を持ち込んでいた。横浜からハワイに向かう船内で書画会が自然発生したという。『欧米遊覧記』には次のように記されている（筆者（湯浅）による現代語訳で掲げる）。

> 太平洋上に書画会を開くとは、何と日本民族の風雅さよ。画人御船君が持ち込んだ十数冊の書画帖は、会員に強要されて、世界一周記念の題名を求められる者が多く、十一日の喫煙室は風流な書画会となった。竹冷・酔香の俳句、大夢（土屋元作）の題字、告天子

（岡野養之助）の自画賛などの評判がよかった。ついに西洋人の蟹字（横文字）さえ画帖中に綴られ、清人の哈・劉諸君もまた名を題したのは、誠によい記念。他日この帖を展覧して旅を回想すれば、その楽しみはどれほどであろうか。（『欧米遊覧記』二二頁）

天囚が「画人御船君」と記しているのが、御船綱手である。一行が乗船していたのは東洋汽船のサンフランシスコ航路に就航したばかりの大型貨客船「地洋丸」一万四千トンであった。この書画会で俳句を寄せたという「竹冷」は、明治・大正期の俳人・政治家。本名は角田真平（竹冷は号）。東京府会議員、東京市会議員、衆議院議員を歴任したが、第二回世界一周会参加者名簿に記載された当時の職名は「東京市区改正局長、大日本博覧会理事官」である。この一周会の委員長を務めていた。「醉香」は、地洋丸に同乗してアメリカに赴くニューヨーク総領事の水野幸吉（醉香は号）である。日本からワシントンのポトマックに桜が寄贈された際、その仲介役を果たしたとされる。「大夢」「告天子」は、それぞれ土屋元作と岡野養之助の号で、二人は天囚と同じく朝日新聞の特派員として参加していた。地洋丸には多くの著名な文人が乗っていたのである。風流な書画会が自然発生したのも当然であった。

また、記名した清人の「哈・劉諸君」とは、清国の皇族濤貝勒（愛新覚羅溥儀の叔父）に随行していた哈漢章と劉恩源。濤貝勒は清国の軍事考察団として日本からアメリカへ向かうところであった。哈漢章（一八七九～一九五三）は日本留学の経験があり、陸軍士官学校第二期歩兵科卒である。この考察団に参加し、明治天皇に拝謁した際、天皇から「福」「壽」の大字を記した書を賜ったという。また、劉恩源（一八七三～?）は、天津の武備学堂を卒業後、ドイツ留学を経て、この軍事考察団の一員となっていた。(2)

この他、『欧米遊覧記』には、ニューヨークからイギリスに渡るバルチック号の船内で運動会が開催された際、優勝者に賞品として御船自筆の日本画が贈呈され喝采を浴びたことが記されている（同書二四四頁）。御船は、スケッチ用の白紙の画帖とは別に、あらかじめ自筆の日本画を準備していたのである。

ではなぜ、そもそも御船はこの旅行に参加することになったのであろうか。この点について、世界一周会の六年後に刊行された三島聰恵編『続浪華摘英』（一九一六年）は、「御船綱手先生」の項目を立て、「泰西美術研究の目的を抱き彼の地に赴こうとしたが、洋行費数千円を要するため、一大画会を企てたところ、在阪の名士が大いにその挙に賛同し、旅費が調った」と説明している。御船自身の研究心が背中を押したということであろう。旅費も、画会を開くことによって自身で調達したのである。

ただ、もう一つ、朝日新聞社側から参加を促されたということも考えられる。

東京から大阪に移り住んだ御船は、すでに著名な画家として評価されていた。例えば、御船二十六歳の時に当たる明治三十五年（一九〇二）二月、その一ヶ月前に調印された日英同盟の祝賀会が大阪中之島公園で挙行された。同年二月二十六日付け朝日新聞によると、この祝賀会に御船も招待され、揮毫席において健筆を揮ったという。若くして大阪ではすでに著名な存在であった。そして明治四十年（一九〇七）、朝日新聞社と御船綱手とを強く結びつけたと思われる大きな出来事が生じた。世界一周会参加の三年前のことである。

当時、日本画壇に大きな変革が起こりつつあった。明治四十年八月、文部省の美術展覧会の審査委員人選をめぐり、大きな対立が生じた。同年秋に開催が予定されていた文部省の美術展覧会に反対を表明する日本美術協会、日本画会、日本南宗画会、南画会、日月会などの諸派が「正派同志会」を結成し、所属会員百余名は出品を見合わせ、同時期に開催される美術協会展覧会に出品することとしたのである。同年八月十七日付け朝日新聞は、それを「文部省に対抗する一大同盟」として記事にした。

そして、同年十月二十五日、文部省の美術展覧会が開催され、ここには、下村観山、竹内栖鳳、横山大観らの大作も出品されて好評を博した。朝日新聞は、この文部省の美術展覧会と正派同志会連の美術協会の展覧会とを同時に取りあげて、同年十一月三日より、滝節庵の美術評論を連載した。滝節庵、本名は精一（一八七三〜一九四五）。号は節庵、拙庵。日本画家滝和亭の長男である。東京帝国大学哲学科卒。美術史学者で東京帝国大学教授。東洋日本美術史学を講じ、美術雑誌『国華』の主幹を務めた。『国華』は明治二十二年に岡倉天心と高橋健三が中心となって創刊したが、節庵はその高橋の甥にあたる。

節庵の総評は、「公平に見れば誰しも文部省の展覧会は美術協会のそれに勝っていることを認めるであろう」、「美術協会の展覧会は慥かに文部省の展覧会に敗北した」というものであった。しかし、それは全体を俯瞰した批評であり、さらに細部を比較すれば、文部省の方にも忌むべき欠点があり、また美術協会の方にも取るべき長所もあるとする。そして具体的に賞賛されているのが、御船綱手なのである。批評の第六回（明治四十年十一月九日付け）にこうある。

一体このたび大阪の画家は、過半文部省に反対して美術協会に出品したるもののようで、平井直水、御船綱手、深田直城、大塚春嶺、小山雲泉、鎌田梅石氏らをはじめ錚々たる人々が大分に奮って出品しているが、その中で最も見るべきは、御船綱手氏の「南紀濟渓」

の図である。

この事件を通して、御船綱手は、反骨の画家としても注目される存在になったのではなかろうか。明治四十一年の第一回世界一周会では、旅行中に撮影された写真が、後に石川周行『世界一周画報』（博文館、一九〇八年九月）に掲載された。御船が参加した第二回は訪問先がほぼ同様であったため、こうした写真集の刊行は当初から予定されておらず、それに代わるものとして、彩色画によって名所旧跡を描くという趣向が発案されたのであろう。そして、その適任者と考えられたのが、他でもない御船綱手だったのである。

## 二、世界一周会の旅程

御船が参加した第二回世界一周会の旅程を確認しておこう。旅程は当初、全八十五日として新聞発表されたが、会員確定後、会員たちの強い要望もあって百四日に延長された。それが明治四十三年三月十日付け朝日新聞に最終確定版として発表された。以下に掲げるのは、実際の旅程であり、最終確定版とは若干の異同はあるが、大きな変更はない。なお、滞在地の末尾につけた01～72の数字は、次章で検討する御船綱手の彩色画全七十二枚の通し番号である。符号の意味については次章で解説する。

明治四十三年（一九一〇）四月六日　東洋汽船の地洋丸で横浜発
四月十五日　ハワイ着　【01】～【04】
四月十六日午後四時、ハワイ発
四月二十二日　サンフランシスコ着
四月二十三日　同地滞在　【05】
四月二十四日　同地出発
この間、大陸横断鉄道　（06）～（10）【17】

四月二十七日　シカゴ着
四月二十八、二十九日　同地滞在　【16】【18】
五月一日　ナイアガラ着　【11】～【15】
五月二日　ボストン着
五月三、四日　同地滞在
五月五日　同地出発汽船中で一泊
五月六日　ニューヨーク通過ワシントン着　【19】
五月七、八日　ワシントン滞在
五月九日　ワシントン発ニューヨーク着
五月十～十三日の四日間　ニューヨーク滞在　【20】
五月十四日　バルチック号にてニューヨーク出発
五月二十一日　アイルランド着　【28】
五月二十二日　リヴァプール着、直ちに出発ロンドン着
五月二十二～六月三日まで十三日間　ロンドン滞在　【21】～【27】
六月四日　ロンドン発パリ着
六月五～八日の四日間　パリ滞在　【29】～【32】
六月九日　パリ出発
六月十日　イタリアジェノヴァ着　【33】
六月十一日　ジェノヴァ発ローマ着
六月十二～十四の三日間　ローマ滞在　【34】～【36】
六月十五日　ローマ発ナポリ着　（42）

六月十六日　ヴェスヴィオ火山、ボンペイ見物　【46】
六月十七日　ナポリ発ローマ帰着
六月十八日　ローマ発ヴェニス着
六月十九日　ヴェニス滞在　【38】～【41】
六月二十日　ヴェニス発ミラノ着
六月二十一日　ミラノ発ルツェルン着　【37】【43】【44】【47】（49）（51）（53）（55）～（58）
六月二十一～二十三日　ルツェルン滞在　【50】【52】【54】
六月二十三日　ルツェルン発マインツ着　【59】（60）
六月二十四日　マインツよりライン川下り
六月二十五日　ケルン着
六月二十六日　ケルン発ベルリン着　【64】【63】
六月二十七～三十日　ベルリン滞在　【61】【62】（65）～（68）
七月一日　ベルリン発
七月二日　サンクトペテルブルグ着
七月三日　同地滞在　【69】
七月四日　サンクトペテルブルグ発
七月五日　モスクワ着
七月六日　モスクワ発シベリア横断鉄道乗車　【70】【71】（72）
七月十五日　イルクーツク着
七月十六日　ウラジオストク着
七月十七日　大阪商船鳳山丸にてウラジオストク発

七月十八日　敦賀に帰着

それでは、こうした旅程と御船綱手の絵とはどのような関係にあるのだろうか。

## 三、「欧山米水帖」全七十二枚の概要

御船が描いた七十二枚の絵について、その概要を確認してみよう。御船は、全三冊の画帖を収めた桐箱に、「世界周遊実寫　歐山米水　大正癸丑夏　綱手」と自筆している。これに基づいて倉敷市立美術館では、この作品を大正二年（一九一三）成立、名称を「世界周遊実写　欧山米水帖」としている。これらの絵の成立と名称については後の章で改めて検討することとし、以下では便宜上、この作品を「欧山米水帖」と仮称して論述することとしたい。また、各絵には01～72の通し番号を付けるが、この番号は、「欧山米水帖」全点のモノクロ画像を掲載する倉敷市立美術館編『倉敷市立美術館所蔵品目録』（倉敷市立美術館、一九九四年）も同様に付けている。それぞれの絵には、御船綱手自身が画題を記しているので、本稿でもその名称に従い、27頁以降に画帖見開きの状態で全枚を掲載する。

全体の概要を総括して先に言えば、この七十二枚の絵は、第二回世界一周会の旅程にほぼ沿って並べられている。前章に記入した番号が、ほぼ旅程順になっていることが確認されよう。以下、詳しく見ていこう。

明治四十三年四月六日に横浜港を出航した世界一周会は、日付変更線を越えた後、四月十五日に、布哇（ハワイ）のホノルルに到着した。御船綱手「欧山米水帖」は、このハワイから始まる。ここでは、01「布哇土人家屋」、02「布哇ホノルルダイヤモンドヘッド」、03「布哇ホノルル水田」、04「布哇ホノルルパリ」の四枚の絵を掲げている。

「土人家屋」は藁葺き屋根の民家とサボテンのような大きな植物。荷を背負った農夫が一人描かれている。天囚が『欧米遊覧記』で、ハワイには見慣れぬ植物が多いと言っていた通りである。「ダイヤモンドヘッド」には湾内に浮かぶ三艘の小船が見える。いずれも赤い帆を上げている。「水田」は牛を使って田を耕す農夫が描かれる。「パリ」とは、ワイキキ郊外の古戦場で、一七九五年、カメハメハ一世が統一戦争に勝利した高台。パリはハワイ語の「崖」の意味で、御船綱手の絵には、峻嶮な山とその手前に展望台のようなものが見える。

ワイキキ市内からパリまでは二十キロ以上あるが、一行は自動車に分乗して行ったのである。『欧米遊覧記』では「自働車」と記されている。

ハワイを出航して再び太平洋を航行し、四月二十二日、アメリカ西海岸の桑港（サンフランシスコ）に到着した。「欧山米水帖」には、05「桑港ゴールデンゲート」があり、湾内に小さな帆船が浮かんでいるのどかな光景である。

ここから一行は、大陸横断鉄道でシカゴ、ナイアガラの滝に向かう。「欧山米水帖」は、シカゴまでの大陸横断鉄道において、06・07「北米ヨセミテ渓」を二枚と08「北米ヨセミテ渓谷・瀑布」を描いている。ただし、『欧米遊覧記』では、サクラメントを出発した列車がシエラネバダ山脈に入って、タホー湖の北側を通り、亜米利加川（ノース・フォーク・アメリカン川）の急流を見た後にブルーキャニオン駅に至ると記されている。ヨセミテ渓谷は、この路線からはかなり南であり、車窓からは見えなかったのではないかと思われる。

同様に、「欧山米水帖」には09「米国コロラド渓谷」もあるが、大陸横断鉄道は、ソルトレイクシティを出発してグリーンリバーに至り、コロラド川を渡ってはいるが、コロラドの渓谷と聞いて連想される、いわゆるグランドキャニオンははるか南方で、この鉄道路線からは外れている。また、10「北米コロンビヤ河」も、カナダのブリティッシュコロンビア州のカナディアンロッキーに発するコロンビア川であるとすれば、それは、アメリカのワシントン州を流れ、ポートランドで支流のウィラメット川と合流してオレゴン州の太平洋側に流れ出るので、大陸横断鉄道の沿線ではない。このあたりが御船綱手の「実写」なのかどうかについては、『欧米遊覧記』からは判断がつかない。

ナイアガラの滝は世界一周会の一つの目玉であった。御船綱手もナイアガラにはひときわ感動したらしく、「欧山米水帖」全七十二枚中、ナイアガラの絵を四枚も描いている。12「ナイアガラ」、13「北米ナイヤガラ瀑布」、14「ナイヤガラ」、15「ナイヤガラ瀑布」である。その直前の11「カナダ山間」も、ナイアガラ瀑布見学の際のものであろう。

ただし、この後に続く三枚の絵、16「米国シカゴ公園」、17「ネバダ山中」、18「米国シカゴミシガン湖畔」は、世界一周会の時系列から言えば、むしろ逆転しているであろう。御船綱手「欧山米水帖」は、基本的には世界一周会の旅程に沿って絵が並べられているが、部分的にこのような逆転現象が見られる。何せ七十二枚もの大量の絵である。「画帖」に仕立てる際に何らかの混乱があったのかもしれない。

ナイアガラ見物を終えて、一行はアメリカ東海岸の諸都市をめぐる。「欧山米水帖」は、ワシントンについては一枚、19「華盛頓府国

会議事堂」を掲載している。斜め右側からのアングルである。『欧米遊覧記』によれば、一行が国会議事堂を訪問したのは、ワシントンに到着した日、すなわち五月六日の午後であった。

ニューヨークについても一枚、20「米国紐育セントパトリック寺院」を描いている。『欧米遊覧記』には、残念ながらセント・パトリック大聖堂についての記述は見られないが、この大聖堂は、一行が市内見物で巡った、マンハッタン区のロックフェラー・センターの近くにあるので、御船が実見したのは間違いないであろう。

なお、大陸横断鉄道沿いには多くの絵を残した御船であるが、アメリカ東海岸の諸都市については、滞在期間が充分あったにもかかわらず、ワシントンとニューヨークの各一枚にとどまっている。

ニューヨークから一行は大西洋を渡り、イギリスに向かった。「欧山米水帖」には、28「愛蘭土ケリーアッパー湖」がある。ただしそれは、イギリスの絵七枚の後に配置されている。大西洋をバルチック号で航行した一行は、愛蘭土（アイルランド）を経てイギリスに到着したのであるから、時系列で並べるとすれば、この絵は本来イギリスの前にあるべきであったと思われる。

そのイギリスについては七枚もの絵を掲げている。21「英国倫敦塔橋」、22「英国国会議事堂」、23「英京テイムス河上流」、24「英国テームス河畔グレートマロー旧市」、25「英国ウィンゾル宮殿」、26「英国デルウェント湖」、27「英蘭オツクスフォールド近傍」である。滞在期間が長かったので当然とも言えようが、市内・郊外に、歴史的建造物あり、風光明媚な景観ありで、スケッチが進んだのであろう。この内、『欧米遊覧記』との対照によって、スケッチの日をほぼ特定できるのは、五月二十五日のロンドン塔橋、五月二十八日の国会議事堂、翌二十九日のテムズ川上流、六月二日のウィンザー城などである。

フランスも御船綱手を刺激したようで、「欧山米水帖」には四枚の絵が描かれている。29「佛国巴里市ショーモン公園」、30「巴里ブーロン公園」、31「巴里郊外ヴェルサイユム宮殿」、32「巴里市ボアドブーロン公園」である。この内、『欧米遊覧記』との照合によりスケッチの日をほぼ特定できるのは、ヴェルサイユ宮殿が滞在初日の六月五日、ショーモン公園が滞在二日目の六月六日である。また、ヴェルサイユ宮殿の絵は世界一周会が見物した噴水の様子である。坂の上の宮殿を背景に勢いよく水が吹き上がっている。

イタリアについては、フランス・イタリア国境、イタリア・スイス国境を含めて十六枚もの絵を掲載している。現在でも、最多の世界遺産を誇る国であるから当然ではあろうが、古代の史跡、芸術的な建造物、自然景観など、いずれも御船綱手の心に響き、筆を動かした

のである。

画帖の順番にタイトルを掲げると、33「仏伊国境所見」、34「伊太利ローマコロシアム廃址」、35「伊太利ローマパラチノー丘廃址」、36「伊太利羅馬近郊」、37「伊太利ルガノ湖」、38～40「伊太利ヴェニス」、41「ベニス魚河岸」、42「伊太利カプリ島」、43「伊太利ルガノ湖」、44「伊太利マヂオレー湖」、45「伊太利カプリ青洞穴」、46「伊太利ナポリヴエスヴィヨ火山」、47「伊太利コモ湖」、48「伊太利チボリ瀑布」となる。

『欧米遊覧記』と照合してみると、「仏伊国境所見」は六月十日、「パラチノー丘廃址」と「コロシアム」は六月十二日、「羅馬近郊」はおそらく同日か翌十三日。意外にも十三日に訪問したサン・ピエトロ大聖堂やバチカン宮殿、トレビの噴水（泉）、パンテオン、ジャニコロの丘などは画帖に見当たらない。

「カプリ島」は、六月十五日に到着したナポリから見える島。ティレニア海に浮かぶ風光明媚な島で、「カプリ青洞穴」とは、その島にある海食洞窟（青の洞窟）である。ただし、『欧米遊覧記』では、一行がこの島に渡ったという記述はない。

「ヴエスヴィヨ火山」（ベスビオス火山）は、手前の海上に帆船が浮かび、後方の山にかすかに噴煙が上がっている。一行がアプト式鉄道でこの山に登ったのは六月十六日である。ヴェニス関係の四枚は六月十九日と二十日のスケッチに基づくものであろう。一行が乗船したというゴンドラ船も描かれている。「ルガノ湖」（ルガーノ湖）「マヂオレー湖」（マッジョーレ湖）「コモ湖」は、いずれもミラノからスイスに向かう途中のアルプス山中の湖で、ここを通過したのは、六月二十一日である。一部時系列になっていない絵があり、また、ルガーノ湖が37と43に別れ、カプリ島が42と45に別れている理由も分からない。

次のスイスは、世界一周会員五十七名が確定した後、会員たちの強い要望で旅程に追加された訪問地である。御船綱手「欧山米水帖」も、スイスについては十二枚もの絵を掲げている。49「瑞西マッテルホルン峯」、50「瑞西ルセルン湖ウイルアムテル祠」、51「瑞西スタープアーム瀑布」、52「瑞西ルセルン湖畔石門」、53「瑞西ロームスダルスホーン山」、54「瑞西フルヱレン街」、55「瑞西ユングフラウ峯」、56「瑞西ヤシ瀧」、57「瑞西ウエツテルホルン峯」、58「瑞西アルプス残雪」、59「瑞西ライン急湍」、60「瑞西ゼネーヴァ湖シヨン城址」。いずれも自然景観や古城などを描いた絵である。

この内、「マッテルホルン」は、イタリアのミラノからマジョレー湖を通って北のアルプスに向かう際、一行の左手にそびえる四四七

八メートルの高峰マッターホルンであるが、マジョレー湖付近からは百キロくらい離れている。はたして遠望できたのかどうか、『欧米遊覧記』の記述にはそのことが見えない。

次の「ルセルン湖ウイルアムテル祠」とは、スイス建国にゆかりのある伝説上の英雄ウイリアムテルの史跡である。一行が滞在したルツェルン湖の南端に位置するアルトドルフからさらに東に行ったビュルグレンという小さな村が、テルの生まれ故郷である。

同じく、ルツェルン湖の南端湖岸にあるのが「フルエレン街」と記されるフリュレン。御船綱手の絵は、湖側から望む街とその後方に聳(そび)える山を描く。

「スターブアーム瀑布」はシュタウプバッハ滝。御船綱手の滝の絵は、ブリエンツ湖から南下したラウターブルンネン鉄道駅から見上げる角度となっているが、一行はミラノからルツェルンに向かう際、コモ湖、ルガーノ湖、ビヤスカを経てまっすぐ北上しているので、ここはかなり西方にずれていることになる。また、この南方にそびえるのがユングフラウ、さらにその西のベルン・アルプスの高峰の一つがウェッターホルンであるから、「ユングフラウ峯」や「ウエッテルホルン峯」も同様の事情となる。

さらに遠方にあるのは、「ゼネーヴァ湖シヨン城址」。これは、スイス・フランス国境にまたがるレマン湖畔にあるシヨン城のこと。イギリスの詩人バイロンの詩「シヨンの囚人」「シヨン城詩」の舞台である。なお、「ゼネーヴァ」とは、レマン湖の英語読みのジュネーヴ湖に基づく表記であろう。世界一周会の行程からは、はるかに西方となるので、「実写」なのかどうか『欧米遊覧記』からは確認できない。

「ライン急湍」は一行が船で下ったライン川。スイスアルプスのトーマ湖に源を発し、ボーデン湖からドイツ・フランスの国境を北に向かう。「瑞西」の「急湍」とあるので、ボーデン湖から、ドイツ国境南のバーゼル付近までの間ではないかと推定される。

御船綱手「欧山米水帖」は、マインツ、ケルンについては絵がなく、ベルリンについては61「独逸伯林ビクトリヤ公園」、62「独逸ポツダム離宮」の二枚、およびライン川下りの63「ライン河畔ドラフエンフェルス城」、64「独逸ラインスタイン城」の二枚を掲げている。

一行はスイスからドイツのマインツに至り、そこからライン川を下ってケルンまで行った後、ベルリンに向かったのであるから、この四枚の絵は、時系列としては、むしろ逆になる。マインツを出発して、ライン川の左岸に見えてくるのが「ラインスタイン城」（ラインシュタイン城）、さらに下った右岸に見えるのが「ドラフエンフェルス城」（グーテンフェルス城）である。時系列に並べるなら、この二枚が先で、ベルリン、ポツダムはその後ということになろう。

なお、世界一周会は、ドイツからロシアへと直行するのであるが、「欧山米水帖」には、この後、オランダとノルウェーの絵が四枚入っている。65「和蘭風景」、66「和蘭田舎」、67「那威北岬」、68「那威峡湾」と題する。これらは、はたして御船の「実写」であろうか。

『欧米遊覧記』によれば、スイスからライン川を下ってケルンに向かう際、ケルン着が予想より早かったため、一泊分を切り上げて、次の訪問先ベルリンに先発した一行がいたという。また、ベルリン滞在の丸四日の間に「自由行動日」があったとされている。同年一月に朝日新聞に発表された募集要項にも、「六月二十七、八、九、三十日の四日間、伯林滞在、ハンブルグ、ポツダム等見物の余裕あり」と記されていた。

この先発した一団、および自由行動日の個々の行動については『欧米遊覧記』には明記されていないが、この四枚が「実写」だったとすれば、御船はこの間を利用して鉄道でオランダに行き、さらに船でノルウェーに渡ったのではないかとひとまず推測される。世界一周会の本隊は、オランダ、ノルウェーには立ち寄っていないが、御船は別行動を取った可能性がある。もしそうだとすれば、「欧山米水帖」は、御船綱手の美術作品として評価されるばかりではなく、世界一周会全体の詳細な動向についても、貴重な証言になっているかもしれない。この点については、後の章で改めて検討してみたい。

ロシアについては、69「露都冬宮」一枚を掲げている。対岸から見たサンクトペテルブルグ冬宮の遠景である。これにより、世界一周会は欧米諸都市の訪問を終え、モスクワからシベリア鉄道で極東のウラジオストクに向かう。

「欧山米水帖」は、このシベリア鉄道の沿線について、70「西比利亜バイカル湖」、71「西比利亜平原」、72「西比利亜」の三枚を掲げ、これで全三冊、計七十二枚の画帖を終えている。「バイカル湖」は、象の鼻のように岩が湖岸まで垂れ下がった景色。「西比利亜平原」は一行がシベリア鉄道のチタからオロビャンナヤ駅あたりで見た駱駝が描かれている。駱駝五頭と遠くに小さな風車小屋。

『欧米遊覧記』によれば、一行がバイカル湖に到着したのは七月十三日。駱駝を見たのは、翌十四日の夕方である。御船綱手のスケッチはこの頃に描かれたと推定できる。

最後の「西比利亜」の絵は、「欧山米水帖」全体が「実写」であったかどうかという点において極めて重要な意味を持つと思われる。その景色は、小さな川の左岸に馬が一頭。その向こうに民家が数軒と、針葉樹のような樹木が描かれている。ところが、不思議なことに、雪が積もっているように見える。一行がシベリア鉄道に乗車したのは、猛暑が懸念されていた七月である。

このような観点から、改めて七十二枚の絵を振り返ってみよう。すると雪景色の絵が他にもいくつかあることに気づく。06「北米ヨセミテ渓谷」は、後方の高い山のみならず、手前の樹木も雪をかぶっている。09「北米コロラド峡谷」、10「北米コロンビヤ河」は全体が水墨画のようで判然としないが、これも遠景・近景とも雪が描かれているようにも見える。遠景の高山が冠雪しているものとしては、17「ネバダ山中」、33「仏伊国境所見」、43「伊太利ルガノ湖」、47「伊太利コモ湖」などがあり、また49「瑞西マッテルホルン峯」から55「瑞西ユングフラウ峯」、57「瑞西ウエッテルホルン峯」などのスイスの絵にも冠雪した山が描かれている。

58「瑞西アルプス残雪」は御船自身が「残雪」とタイトルを付けているので当然ではあるが、遠景の山は冠雪している。ところが、手前の雪原を馬に引かせた橇（そり）で進む人も描かれていて、この絵の全体が雪景色であることが分かる。63「ライン河畔ドラフエンフェルス城」は城およびその城を乗せる山全体が白い雪に覆われていて、手前の樹木にも厚い雪が覆っている。ノルウェーの絵とされる67「那威北岬」は、手前は緑に覆われているが、後方の山々には白い雪が描かれている。また、68「那威湾峡」は近景の左手の山には雪は見えず滝も流れているが、後方の高山は冠雪している。

このように、遠景の高山が冠雪している絵を除いたとしても、近景・平地も雪に覆われた絵が数多く含まれているのである。世界一周会は四月から七月にかけて欧米をめぐった。確かに、アメリカ大陸横断鉄道沿いの山々やアルプス山脈の高山には残雪・万年雪があったと思われる。しかしそれ以外の平地で一行が積雪を見たという記述はない。御船綱手の絵の色も、全体的には水の「青」、草木の「緑」が基調となっている。天囚も、この旅が成功した第一の要因として、旅行の季節の選択が良かったことをあげていた。時に雷雨に見舞われたり、雨による川の増水があったりしたことは『欧米遊覧記』にも記されているが、積雪に関する情報は見られない。色を「青」や「緑」ばかりにすると全体が単調になってしまうので、あえて色彩の異なる季節の絵としたのであろうか。

いずれにしても、これまで紹介してきた御船綱手の七十二枚の絵は、ほぼ世界一周会の旅程に沿って、現地の風景を描いたものであったが、一部、旅の時系列と合わないもの、一行が実際に訪問した場所であるかどうか『欧米遊覧記』からは確認できないものもあった。そこで、前章に掲げた絵の番号を今一度確認してみよう。番号に附した符号の意味は次の通りである。

【　】……『欧米遊覧記』との対照により「実写」であることがほぼ確認できるもの。

（　）……『欧米遊覧記』からは「実写」であるか判断できないもの。
傍線……世界一周会旅程の時系列からずれているもの。

この番号と符号から明らかなように、七十二枚の絵は、一部時系列になっていないものがある。もともと一枚一枚個別に描いたものを画帖に仕立てる際に何らかの混乱があったのかもしれない。また、（　）付きのものは、『欧米遊覧記』からは「実写」であるかどうか確認できないものであり、オランダ、ノルウェーを除くと、アメリカ大陸横断鉄道沿いとイタリアからスイスに向かうアルプスの山岳鉄道沿いに集中していることが分かる。またそこに雪景色の絵が多いことも確認されよう。

御船綱手は、これらの絵のタイトルを「世界周遊実写　欧山米水」と自ら記したのであるが、すべてが「実写」であったかどうかについては、慎重に考えておく必要があろう。中には、御船の心象風景として描かれたもの、他の季節に置き換えて彩色したものもあるのではないか。「瑞西」や「西比利亜」などの雪景色は、その可能性を強く感じさせるのである。

## 四、西村天囚の「題簽」と「題辞」

そこで、この問題とも関連する西村天囚の題簽と題辞を検討する。天囚は、御船綱手から依頼を受け、この画帖三冊にそれぞれ題簽を書き、また題辞を記しているのであるが、そもそも御船はなぜ天囚に題簽と題辞を依頼したのであろうか。また天囚はそれをどう受け止めたのであろうか。

天囚は大阪朝日の社員であったから、大阪における御船の活躍は世界一周会の前から充分知っていたであろう。また、朝日新聞に美術批評を連載した滝拙庵は『国華』の主幹を務めたが、その刊行は朝日新聞社によるものであった。天囚の郷里種子島の西村家には、多くの天囚関係資料が残されていて、その中には、『国華』のバックナンバーと、滝が天囚の弟の時輔（ときすけ）にあてた書簡八通も見える。

また当時、天囚は、大阪の文人たちのサークル「浪華文学会」や「景社」を主宰し、明治四十二年（一九〇九）には大阪府立図書館の初代館長今井貫一らと「大阪人文会」を組織していた。これらの活動を通じて、漢文学者天囚の名はあがり、石碑の撰文を求められたり、

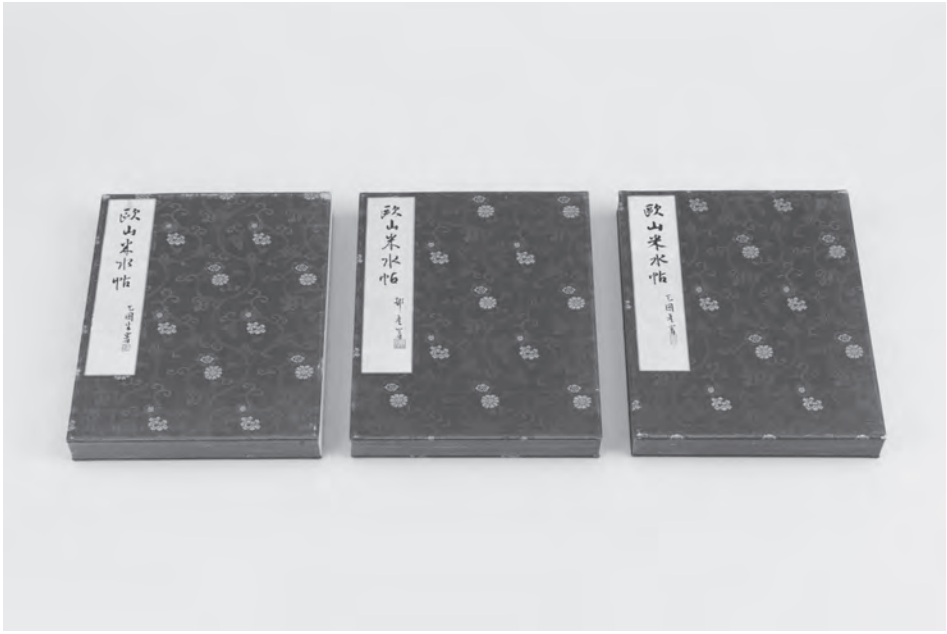



図１　御船綱手「欧山米水帖」全三冊の外観

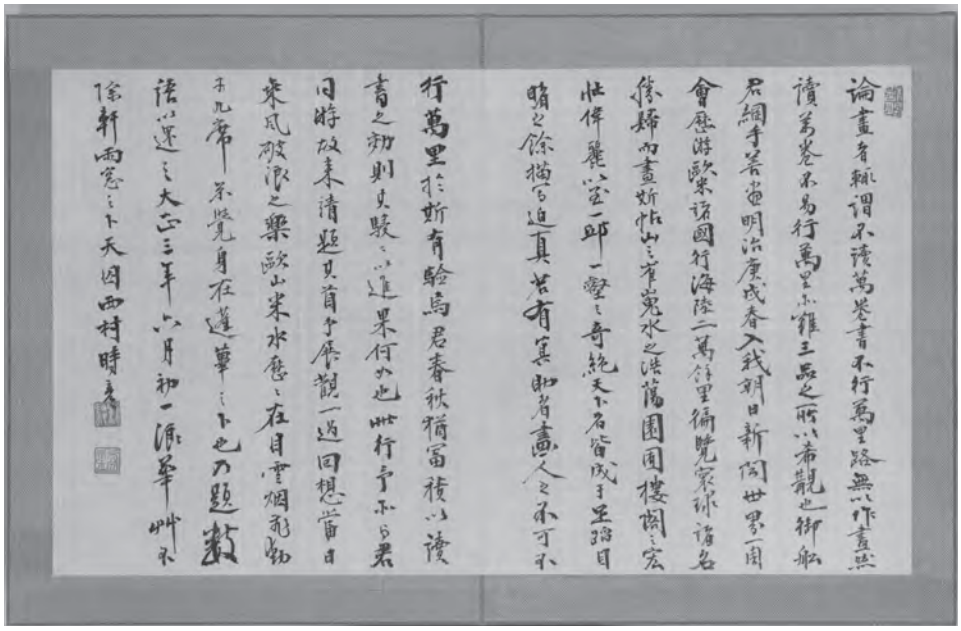


図２　「欧山米水帖」の西村天囚題辞

漢文の添削を依頼されたりするようになった。(3) 御船も年長者の天囚を慕って漢文による題辞を依頼したのではなかろうか。もちろん、世界一周会百四日間の旅で寝食をともにしたというのが直接的な動機であろう。御船からの依頼を、天囚が快諾したのは当然のことであったと思われる。

御船綱手の絵に、天囚自筆の漢文による題辞が添えられ、全三冊による画帖（各冊三〇・〇×二三・四×三・五㎝）が完成したのである。天囚は、自ら三冊の画帖それぞれに「欧山米水帖」と題簽を記している（図1）。署名・落款はそれぞれ「天囚彦署［天囚（陽刻）］」、「邨彦署名［天囚（陰刻）］」、「天囚生署［彦（陽刻）］」である。

それでは、念のためにその天囚の題辞（図2）を確認してみよう。以下、天囚の原文、筆者による書き下し文、現代語訳、語注の順に掲げる。原文に句読点はないが、ここでは便宜上付けている。

（原文）

論畫者、輒謂不讀萬卷書、不行萬里路、無以作畫。然讀萬卷不易、行萬里亦難。三品之所以稀覯也。御船君綱手善畫。明治庚戌春、入我朝日新聞世界一周會、歷游歐米諸國、行海陸二萬餘里。徧覽寰球諸名勝、歸而畫斯帖。山之崔嵬、水之浩蕩、園囿樓閣之宏壯偉麗、以至一邱一壑之奇絶天下者、皆成于足蹈目睹之餘、描写迫真、若有冥助者、畫人之不可不行萬里、於斯有驗焉。君春秋猶富積以讀書之効、則其駸々以進、果何如也。此行予亦與君同游。故來請題其首。予展觀一過、回想當日、乘風破浪之樂、歐山米水、歷々在目。雲烟飛動于几席、不覺身在蓬葦之下也。乃題數語以還之。大正三年六月初一、浪華艸不徐軒雨窓之下、天囚西村時彦。

（書き下し文）

画を論ずる者、輒ち万巻の書を読まず万里の路を行かずして、以て画を作る無かれと謂う。然れども万巻を読むは易からず、万里を行くも亦た難し。三品の奇覯たる所以なり。御船君綱手、画を善くす。明治庚戌春、我が朝日新聞世界一周会に入り、欧米諸国を歴游し、海陸二万余里を行く。寰球の諸名勝を徧覧し、帰りて斯の帖を画く。山の崔嵬、水の浩蕩、園囿楼閣の宏壮偉麗、以て一邱一壑の天下に奇絶たる者に至るまで、皆足蹈目睹の余に成り、描写真に迫るは、冥助有る者の若く、画人の万里を行かざるべからざること、斯に於

いて験有り。君、春秋猶お富積するに読書の効を以てすれば、則ち其れ駸駸として以て進むこと、果たして何如。此の行、予も亦た君と同游す。故に来たりて其の首に題せんことを請う。予、展観すること一過、当日を回想し、風に乗り浪を破るの楽しみ、欧山米水、歴歴として目に在り。雲烟几席に飛動し、身蓬蓽の下に在るを覚えざるなり。乃ち数語を題して以て之を還す。大正三年六月初一、浪華艸不除軒両窓の下、天囚西村時彦　［紫駿］（陰刻）［天囚居士］（陽刻）

（現代語訳）

画を論ずる者は、みな必ず「万巻の書を読まず万里の道を行かなければ、画を作ってはならない」という。しかし、万巻の書を読むのは容易ではなく、また万里の道を行くのも困難だ。三品の絵が極めて稀なのはこれによる。御船綱手君は絵を得意としている。明治庚戌（四十三年）の春、わが朝日新聞世界一周会に入り、欧米諸国を歴遊し、海陸二万余里を旅した。世界の諸々の名勝をあまねく観覧し、帰国してからこの画帖を描いた。高く険しい山々、広々とした川や湖、広大で佳麗な庭園楼閣から天下に奇絶たる（優れて珍しい）丘や谷に至るまで、みな足で蹈み目で睹た末に成ったもの。その描写が真に迫っているのは、まるで冥助（神仏の手助け）があったかのようだ。画家が万里の道を行かなければならないということは、まさにここにその証しがある。君がさらに年々読書の効果を積み増して行けば、さらに進むことといかばかりであろうか。この旅行に、私も君と同游した。そこで画帖の冒頭に題することを求めにやってきた。絵を拡げて目を通すと、当日が回想され、風に乗り波を破った楽しみと、欧米の山水とがありありと目に浮かぶ。筆跡が躍動していて蓬蓽（粗末な住まい）の中にいるのを忘れるほどであった。そこで数語を題して返したのである。　大正三年六月一日、浪華艸不除軒両窓の下、天囚西村時彦

（語注）

①不讀萬巻書不行萬里路……明・董其昌『画禅室随筆』巻二の「畫訣」に「讀萬巻書、行萬里路、胸中脱去塵濁、自然丘壑內營、立成鄞鄂。隨手寫出、皆為山水傳神矣（万巻の書を読み、万里の路を行き、胸中より塵濁を脱去すれば、自然丘壑内に営まれ、鄞鄂を立成す。手に随いて写出すれば、皆山水の伝神を為す）」とあり、同「畫源」に「不行萬里路、不讀萬巻書、欲作畫祖、其可得乎（万里の路を

行かず、万巻の書を読まざれば、画祖と作らんと欲するも、其れ得べけんや）」とある。これを受けて江戸時代の田能村竹田『山中人饒舌』も、「董玄宰（其昌）曰」としてこの「畫源」の語を引き、「万巻の書を読み万里の路を行く」ことを名画の必須の条件としている。また、天囚より二十八歳の年長となる富岡鉄斎もこの董其昌の語に基づく「讀萬巻書行萬里路」と刻んだ印を使用し、自身全国を旅したことで知られている。天囚はこうした状況を受けて冒頭に「画を論ずる者、輒ち……」と述べたと思われる。「輒」は同じ「すなわち」でも「即」「則」「乃」などとは異なり、多くの論者は必ずというニュアンスであろう。なお、画論ではないが、宋代の黄希・黄鶴『補注杜詩』の原序に「不行一萬里、不讀萬巻書、不可以觀杜詩」とあり、杜甫の山水詩の神髄を理解するためには、一万里を行き、万巻の書を読まなければならないとされている。こうした類似表現も古くからあったことが分かる。

②三品……中国画論における優れた作品の三段階の評語。神品、妙品、能品の三つから成る。元・夏文彦の『図絵宝鑑』に、「三品、氣韻生動、出於天成、人莫窺其巧者、謂之神品。筆墨超絶、傳染得宜、意趣有餘者、謂之妙品。得其形似、而不失規矩者、謂之能品」と見える。

③明治庚戌……明治四十三年（一九一〇）。第二回世界一周会は、同年四月から七月にかけて欧米を周遊した。

④歐山米水……「欧米の山水」の互文。互文については後述。

⑤雲烟飛動于几席……「雲煙」は雲と烟。「几席」は肘掛けと敷物。「雲烟飛動」は筆勢の躍動するさま。杜甫「飲中八仙歌」に「揮毫落紙、如雲煙」、南宋・范成大の随筆『呉船録』巻上に「筆勢揮掃、雲烟飛動」とある。直後の「不覺身在蓬蒿之下」と呼応し、絵の筆勢の素晴らしさに、家の中や書斎の机の前にいるのを忘れるほどであったという意味。

⑥艸不除軒……西村天囚の別号。北宋の周敦頤は天地自然のままを好み、窓の前の草を刈らなかったという。『二程遺書』巻三に、「周茂叔窗前草不除去」と見える（茂叔は字）。天囚もこの故事にちなみ、大阪松ヶ枝町の自宅をそう呼んでいたと思われる。自宅を意味するという点では直前の「蓬蒿」と同じである。種子島西村家の天囚旧蔵印の中に、「草不除軒」という陽刻の石印が発見されており、この題辞の署名により「草（艸）不除軒」が天囚の別号であると確認された。(4)

この題辞により、天囚が御船綱手から依頼されて題簽と題辞を書いたこと、その日付を大正三年六月一日としていることが分かる。

一方、御船綱手はこの画帖を収める桐箱に「大正癸丑夏」と自筆していた。「大正癸丑」は大正二年であり、この前年である。両者の関係はどのように考えられるであろうか。

事情をさらに複雑にしてしまうかもしれないが、実は、天囚の草稿がもう一つ残されている。それは、『碩園先生文集』に翻刻収録された題辞であり、そこには「欧山米水帖題語　甲寅五月」と題して、ほぼ同文が記されている。

天囚が亡くなってから十二年後の昭和十一年（一九三六）、財団法人懐徳堂記念会は天囚の遺稿を編集翻刻し、『碩園先生遺集』線装本全五冊として刊行する。当該の「題語」はその中の『碩園先生文集』巻一所収である（碩園は天囚の別号）。ところが、表題に「甲寅（大正三年）五月」とあり、天囚がこの題辞で記している「大正三年六月」とは一ヶ月の差がある。また、詳細の検討は省略するが、この画帖に記された漢文と『文集』所載の漢文には若干の相違がある。(5)

これについて参考になるのは、天囚が郷里種子島からの依頼によって撰文した「鉄砲伝来紀功碑文」である。この漢文も『文集』に掲載されていることは知られていた。ところが、平成三十一年（二〇一九）の現地調査で、西之表市の種子島開発総合センター（通称鉄砲館）に二種類の草稿が残されていることが分かった。そこで、種子島南端の門倉岬に立つ石碑の碑文と、『文集』所収の漢文と、種子島で発見された二種の草稿とを比較してみると、天囚が何度も草稿に手を入れながら決定稿に近づいていったこと、『文集』所収の漢文は、決定稿とはなお若干の相違があり、完成直前の一つの草稿であることなどが判明した。(6)

こうした天囚の草稿の形成過程を参考にすると、この「欧山米水帖」の題辞についても、天囚は御船綱手から依頼を受けて執筆に取り組んだが、やはり何度か草稿に手を加えつつ完成に近づいていったということが推測される。そして『文集』所収のものは、大正三年五月に一旦完成した草稿であり、懐徳堂記念会は『碩園先生文集』を編集する際、懐徳堂記念会または西村家に残されていたその草稿を基に翻刻収録したと考えられる。

しかし実際には、天囚はさらに若干手を加えて完成させた決定稿を御船綱手に送り、それが画帖に貼り付けられた。懐徳堂記念会はそのことを知らず、あるいは充分確認しなかったため、決定稿と『文集』所収の漢文とには若干の字句の相違が生じているものと推測される。また、『文集』所収の漢文は「乃題數語以還之」で終わっており、画帖題辞の「大正三年六月初一、浪華艸不徐軒雨窓之下、天囚西村時彦」という署名部分がない。このことも、『文集』版が最終稿ではない根拠となろう。

よって、作品の成立については、以下のように整理されるのではなかろうか。御船綱手は明治四十三年七月に帰国した後、約三年近くの歳月をかけて七十二枚の絵を描き上げた。それが大正二年夏である。その後、世界一周会に同行した西村天囚に題辞を依頼し、快諾した天囚は七十二枚の絵を通覧して草稿を執筆し、大正三年五月に一旦草稿ができあがった。これが『文集』版の「題語」である。ただ天囚はその後さらに手を加え、最終的にはその翌月に自筆署名した上で、決定版と題簽を御船綱手に送った。御船は、その題簽と題辞を画帖に貼り付けて、これを収める箱に自ら揮毫した。ただ、七十二枚の絵自体が完成していたのは前年であったため、「大正癸丑夏」と記した。このように推察されるのではなかろうか。

次に、作品名についてはどのように考えられるであろうか。「欧山米水」とは、漢文の語法の一つ「互文」による語である。互文とは、対になった二つの語句で、互いに省略し補いあって意味を成す文構成である。例えば、天地の長久を「天長地久」（『老子』第七章）とし、道塗（みち）での聴説（耳にしたことをすぐに受け売りで人に話す）を「道聴塗説」（『論語』陽貨篇）とするなどである。現代語として使われている「天変地異」「千変万化」なども、この互文による漢語である。欧米の山水を「欧山米水」とするのも、漢学者西村天囚にとっては、腑に落ちる漢語表現だったのではなかろうか。

ただし、「欧山米水」が天囚の新たな造語だったという訳ではない。この世界一周会からちょうど十年前の明治三十三年（一九〇〇）、百五十日余りで欧米旅行を敢行した文筆家・編集者の大橋又太郎（号は乙羽）は、その紀行を『欧山米水』と命名して刊行した。版元は大橋の勤務する博文館。題字を書いたのは、博文館の社名の由来ともなっている伊藤博文、扉画は中村不折、冒頭の木版画二枚は日本画家の橋本雅邦と寺崎広業、続く雪の金閣寺の写真はパリ万博で受賞した光村利藻、という錚々たる顔ぶれであった。表紙の装飾も見事で、本の天（あたま）には金箔を押す、いわゆる「天金」が施された。

内容は、三月三十一日に日本郵船会社の河内丸六千トンに乗って横浜を出航し、神戸、香港から、インド洋、紅海、地中海を経て、フランスに至り、ちょうど開催中のパリ万博を見学するというものであった。大橋はこの続編として、「欧大陸の巻」「英米の巻」を企画していたようであるが、翌年、大橋が三十三歳という若さで亡くなったことにより、それは実現しなかった(7)。

また、明治四十三年七月十八日、天囚たち一行の帰国を迎えた敦賀の喜多村謙吉町長は、その歓迎の辞の中で、一周会の壮挙を「欧山米水を跋渉し、天下の名都を周覧し、奇勝を探り、絶を訪い」と述べている。「欧山米水」は当時すでに定着していた表現ではなかった

かと推測される。大橋の『欧山米水』は、日本からパリに至るのみであったが、天囚はこの世界一周会こそ、「欧山米水」と名乗るにふさわしいと考えたのではなかろうか。

もっとも、別の可能性も一応考えられる。御船綱手が「世界周遊実写　欧山米水」というタイトルを先に決めていて、それを基に天囚が題辞を書いたという可能性である。ただ、そうすると、天囚はなぜ「世界周遊実写」という言葉を、題辞や題簽に織り込まなかったのかという疑問が生じてくる。完成一ヶ月前の草稿と考えられる『碩園先生文集』所載の漢文も、そのタイトルは「欧山米水帖題語」となっていた。

さらに、「欧米」と「世界」の語に対する天囚のスタンスも参考になろう。朝日新聞社はこの旅行を「世界一周会」と命名した。ただ実際にめぐったのは、北半球の欧米諸国であり、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアの三大陸は含まれていない。またアジアも、シベリア横断鉄道で一部通過したのみで、インド、中国などの諸都市には立ち寄っていない。このことから、天囚はその紀行を『欧米遊覧記』と命名し、「世界一周」とは言っていないのである。

このことからも、「欧山米水帖」というタイトルは天囚が付けたのではないかと考えられる。そして、御船綱手がそれに基づき、画帖を収める箱に自らの思いを込めて「世界周遊実写　欧山米水」と墨書したのではなかろうか。

美術品の完成をいつとするか、作品名をどう認定するかは難しい問題かとも思われ、美術史に疎い筆者は、この点については何とも言えないが、画帖としての完成時期は、天囚の題辞と題簽が備わった大正三年六月としておくのがよいのではなかろうか。

## 五、絵画における「真実」とは

それでは、「実写」かどうかという点はどうであろうか。天囚は題辞で「描写、真に迫る」「欧山米水、歴々として目に在り」と賛辞を送ってはいるが、「実写」とは表現していない。「実写」の二字は御船綱手自身の表現であったと推測される。天囚が「欧米諸国を歴游し、海陸二万余里を行く」「足蹈目睹」と記しているように、御船綱手が欧米をその足でめぐりその目で見たものを描いていることは間違いない。ただ、先に検証した通り、時系列から外れていたり、季節が合わなかったりする絵もあった。

また、オランダとノルウェーに御船が立ち寄ったのかどうかについては、天囚の『欧米遊覧記』からは確認できない。もちろん、参加者には自由行動日もあり、御船が一部別行動をとったことも充分考えられる。ただし、自由行動とは言っても、それは世界一周会が訪問した諸都市の近郊に限られており、宿泊を伴って他国へ行くというような意味での別行動ではない。また、この旅行に参加した吉村銀次郎は、世界一周会に関する著書と日記を残していて、そこに極めて興味深い情報が記されている。

吉村銀次郎は東京市会議員として参加し、帰国の五ヶ月後にあたる明治四十三年十二月八日付けで、『欧米市政小観』（昭文堂書店、一九一〇年）という本を刊行している。本文は約七十頁、続いて「日記」五十六頁が附録されている。小冊子ではあるが、天囚の紀行とはかなり異質な内容となっていて注目される。

そこではまず、世界一周会に参加した動機として、「東京市会議員としての職責」を全うし、今や「世界の一等国となった日本の帝都」（東京）のために欧米各市の行政を観察する旨が表明されている。明確な行政視察だったことが分かる。

そのため本文も、「市行政機関の組織」から始まり、欧米各市の「道路」「交通機関」「上水」「下水」「電気事業」「瓦斯事業」、さらに「家屋と其の保証」「公衆衛生設備」などで構成されている。

吉村の観察は、行政関係者の視点から詳細を極めているが、例えば、はじめの「市行政機関の組織」では、ロンドン市の行政が道路・橋梁・教育・警察・図書館などことごとく委員制度で進められていることが特記されている。また、パリ市では、市会議員は同時に府会議員を兼ねること、ベルリンでは、市の要職には学術技芸を修めた者を任用していることなどが記される。

また、上水や電力についても大いに注目している。シカゴの水質が悪い点について天囚も『欧米遊覧記』で同様の感想を述べていたが、吉村の観察で注目されるのは、上水は市民の衛生・健康のためだけではなく、市の重要な財源になっているという指摘である。

関連して「電気事業」については、ナイアガラの滝をとりあげる。一周会の会員たちが、その壮大な瀑布に賛辞を送っていたのに対して、吉村は、その自然景観よりはナイアガラ水力発電所に注目した。こうした水資源が大規模な電気事業になり、市の財政に寄与するとの観察である。そして、スウェーデン・ノルウェーが水力電気事業を国是として盛んに行っているが、旅程上、これらを視察できなかったのは遺憾であると附記しているのである。「日記」を見ても、吉村は、パリからブリュッセルを経由してベルリンに入り、その後、ロシアのサンクトペテルブルグに直行している。

この吉村の記録によれば、やはり世界一周会は北欧方面には行っていないのである。もしオランダからノルウェーに渡るような別働隊があったとすれば、これほど水力電気事業に関心のあった吉村が同行しない訳はない。

加えて、別行動で他国に行く場合、税関通過や切符、宿泊、言葉はどうしたのであろうか。出発前の三月二十八日付け朝日新聞紙面には、関係各国の大使に対する謝辞が掲載された。一周会が訪問する諸国については、税関通過や観光の便宜を図ってもらえることとなったからである。この世界一周会が日英博覧会視察を一つの目玉とするものであったから、イギリスはもちろんのこと、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアなど訪問が予定されていた各国の大使に謝辞が述べられている。しかしここに、オランダ・ノルウェーの名は見えない。はたして税関通過はできたのであろうか。切符やホテルの手配はどうだったのか。またガイドは調達できたのか。こうした様々な疑問が出てくるのである。

先に、このオランダ・ノルウェーの絵は、世界一周会の全容を知る重要な手がかりになるかもしれないと推測してみた。今後もし御船の「日記」類が発見されるようなことがあれば、それを裏付けることができるかもしれない。ただ、まったく別の可能性として、そもそも御船がここには行っていないということも考えられるのではなかろうか。多くの雪景色の絵と重ね合わせると、そのようなことも想定されるのである。

しかし、もしそうだったとしても、そのことは、「欧山米水帖」の価値とは全く別次元の問題であろう。天囚が「欧山米水、歴々として目に在り」と感動する通り、御船綱手の絵は、心に写った真実を描いたものに違いなかった。ここに、カメラの「写真」との大きな違いがあるだろう。写真とは、真実を写すという意味であるが、実際には、心に写った真実ではないもの、他者に伝えたい感動とは異なるものとなってしまう場合もあろう。これに対して絵画は、それを描く人の力量にもよるが、まさに心に写った真実や感動を残すことができる。これこそ絵画の「写実」なのではなかろうか。だから御船は、天囚が題辞に記した「欧山米水」という画題に、自ら万感の思いを込めて「世界周遊実写」と添え書きしたのではなかろうか。

江戸時代の画家田能村竹田も、その画論『山中人饒舌』で、「形似稍易、伝神甚難」と述べている。単に外観をまねるのは易しいが、精神を伝えるのは難しいという意味で、心を写すのが真の画だというのである。

仮に、七十二枚の中に、実際には立ち寄っていない場所の絵や季節の違う絵があったとしても、それらを含めて、「欧山米水帖」は紛

れもなく、この世界一周会を通して御船綱手の心に写った真実だったのである。

この画帖は平成四年（一九九二）、倉敷市立美術館が購入し、同館所蔵品となった。世界一周会の記憶は、御船の郷里倉敷にも残されている。

**注**

（1）拙稿「西洋近代文明と向き合った漢学者―西村天囚の「世界一周会」参加―」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第六十巻、二〇二〇年）。

（2）湖北省地方志編纂委員会編『湖北省志 人物（下）』（湖北人民出版社、二〇〇〇年）、徐友春主編『民国人物大辞典』（河北人民出版社、二〇〇七年）参照。

（3）西村天囚を中心とする当時のネットワークについては、拙稿「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」（『懐徳』第八十七号、二〇一九年）参照。東洋学者の石濱純太郎から漢文の添削を求められたことについては、拙稿「石濱純太郎・石濱恒夫と懐徳堂」（『東西学術研究と文化交渉―石濱純太郎没後五十年記念国際シンポジウム論文集―』、二〇一九年）参照。郷里の種子島から撰文を依頼された鉄砲伝来の碑文については、拙稿「鉄砲伝来紀功碑文の成立」（島根大学教育学部国文学会『国語教育論叢』第二十七号、二〇二〇年）参照。

（4）種子島の西村家に残されていた天囚旧蔵印の詳細については、拙稿「小宇宙に込めた天囚の思い―種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印について―」（『懐徳堂研究』第十二号、二〇二一年）参照。

（5）例えば、「御船君綱手善畫」を文集版は「御船君綱手奇才善畫」に作り、「描写迫真」を「描寫逼眞」に作り、「以至一邱一壑之奇絶天下者」を「以至一邱一壑之微凡奇絶天下者」に作り、「此行予亦與君同游」を「以此行予與君同游」に作るなどの相違がある。また、文末の「大正三年六月初一、浪華艸不徐軒雨窓之下、天囚西村時彦」を文集版はすべて欠いている。

（6）この点の詳細については、注（3）前掲の拙稿「鉄砲伝来紀功碑文の成立」参照。

（7）大橋には、この他にも多くの著作があるが、紀行集として『千山万水』（博文館、一八九九年）がある。この「千山万水」も互文である。

【附記】

・本稿は、公益財団法人三菱財団二〇一九年度研究助成「「天声人語」の名づけ親西村天囚の見た近代日本」による研究成果の一部である。

・御船綱手「世界周遊実写　欧山米水帖」の写真撮影ならびに本稿への掲載については、倉敷市立美術館より格別のご高配を賜った。また、その際、同館の佐々木千恵学芸員より懇切なご教示をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

・江戸時代以来の画論や富岡鉄斎の印については、大阪大学大学院文学研究科の門脇むつみ准教授、堺市博物館の宇野千代子学芸係長より懇切なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

02　布哇ホノルルダイヤモンドヘッド

01　布哇土人家屋

04　布哇ホノルルパリ

03　布哇ホノルル水田

06　北米ヨセミテ渓

05　桑港ゴールデンゲート

08　北米ヨセミテ渓谷・瀑布

07　北米ヨセミテ渓

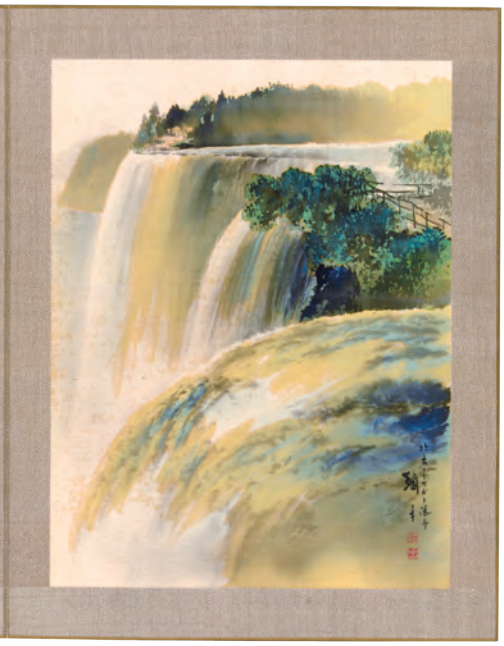
10　北米コロンビヤ河

09　米国コロラド渓谷

12　ナイアガラ

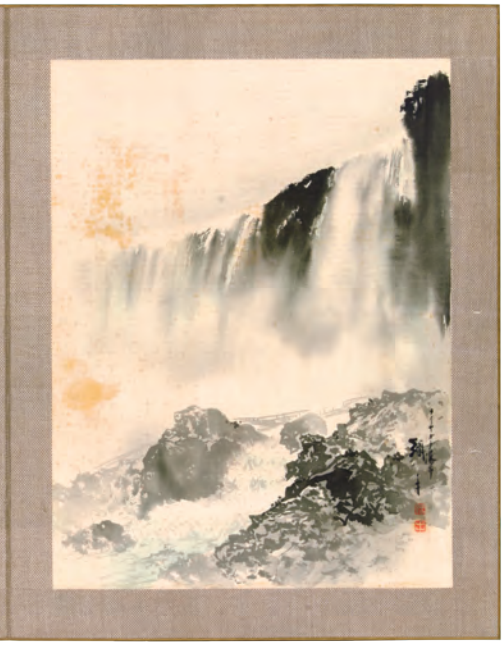
11　カナダ山間

14　ナイヤガラ



13　北米ナイヤガラ瀑布

16　米国シカゴ公園



15　ナイヤガラ瀑布

18　米国シカゴミシガン湖畔

17　ネバダ山中

20　米国紐育セントパトリック寺院

19　華盛頓府国会議事堂

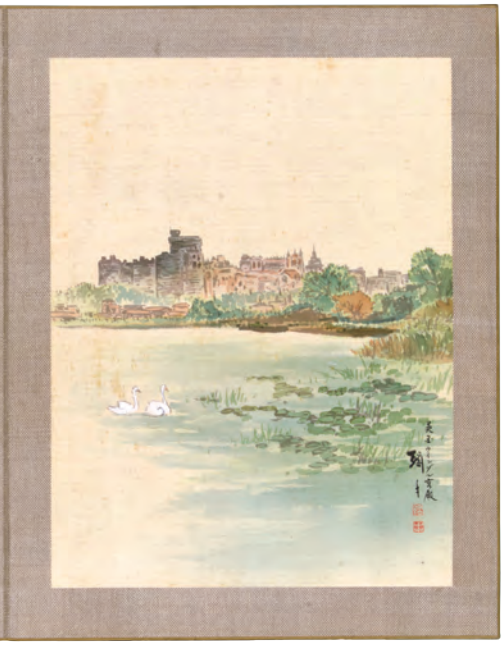
22　英国国会議事堂

21　英国倫敦塔橋

24　英国テームス河畔グレートマロー旧市

23　英京テイムス河上流

26　英国デルウェント湖



25　英国ウィンゾル宮殿

28　愛蘭土ケリーアッパー湖

27　英蘭オツクスフォールド近傍

30　巴里ブーロン公園

29　佛国巴里市ショーモン公園

32　巴里市ボアドブーロン公園

31　巴里郊外ヴェルサイユム宮殿

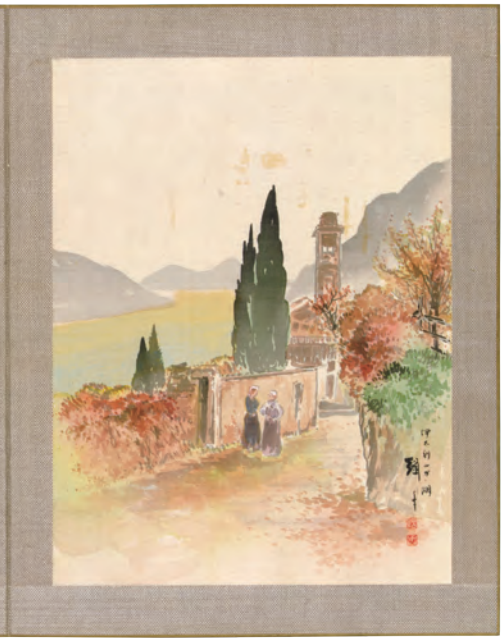
34　伊太利ローマコロシアム廃址

33　仏伊国境所見

36　伊太利羅馬近郊

35　伊太利ローマパラチノー丘廃址

38　伊太利ヴェニス



37　伊太利ルガノ湖

40　伊太利ヴェニス

39　伊太利ヴェニス

42　伊太利カプリ島

41　ベニス魚河岸

44　伊太利マヂオレー湖

43　伊太利ルガノ湖

46　伊太利ナポリヴエスヴィヨ火山

45　伊太利カプリ青洞穴

48　伊太利チボリ瀑布

47　伊太利コモ湖

50　瑞西ルセルン湖ウイルアムテル祠

49　瑞西マッテルホルン峯

52　瑞西ルセルン湖畔石門

51　瑞西スターブアーム瀑布

54　瑞西フルヱレン街

53　瑞西ロームスダルスホーン山

56　瑞西ヤシ瀧

55　瑞西ユングフラウ峯

58　瑞西アルプス残雪

57　瑞西ウエツテルホルン峯

60　瑞西ゼネーヴァ湖シヨン城址

59　瑞西ライン急湍

62　独逸ポツダム離宮

61　独逸伯林ビクトリヤ公園

64　独逸ラインスタイン城

63　ライン河畔ドラフエンフェルス城

66　和蘭田舎

65　和蘭風景

68　那威峡湾

67　那威北岬

70　西比利亜バイカル湖

69　露都冬宮

72　西比利亜

71　西比利亜平原

# 西村天囚『歐米遊覽記』與御船綱手「歐山米水帖」
## ——明治四十三年「世界一周會」的眞實——

湯淺邦弘

明治43年（1910），在朝日新聞社主辦的第二次「世界一周會」上，作爲特派員參加旅行的西村天囚陸續從當地發送回紀行文稿，並在歸國後立刻將其所撰文稿以『歐米遊覽記』爲名加以刊行。而同樣也參加了此次旅行的日本畫家御船網手，則在所到之處致力于風景的素描。歸國後，在此素描的基礎上完成了全三冊共72幅彩色畫的畫冊「歐山米水帖」。

筆者曾基於西村天囚的『歐米遊覽記』，介紹了此次「総五十七名，百四日間」的大規模旅行的概要，對於漢學家西村天囚直面的歐美世界究竟是一個怎樣的世界，進行了基礎性的考察（拙稿「西洋近代文明と向き合った漢學者—西村天囚の「世界一周會」參加—」（『大阪大學大學院文學研究科紀要』第60卷，2020年）。

而在本稿中，則進一步結合了天囚的『歐米遊覽記』與御船綱手的畫冊「歐山米水帖」，來探討世界一周會的實際狀況。

御船綱手的72幅繪畫，雖然基本上按照世界一周會的旅程，對當地的風景進行了描繪，但是也有一部分內容，與旅行的時間順序不符，其所繪場所是否爲旅行團一行實際到訪之處，尚無法通過『歐米遊覽記』加以確認。

世界一周會在４月至７月間巡遊了歐美諸國，而御船綱手的繪畫，雖整體上也是以水「青」草「綠」爲基調，但也含有數幅全面雪景的繪畫。

御船綱手親自將此畫冊的標題起名爲「世界周遊實寫　歐山米水」，但是，其內容是否均爲「寫實」，尚需愼重考慮。其中的部分內容，應該也包含了御船所印象中的風景，以及改變了色彩，置換爲其他季節的風景。

但是，即便存在有並非寫實的內容，也完全無法影響「歐山米水帖」的價值。即使在72幅繪畫當中，存在實際未到訪的場所以及不同季節的繪畫，包含這些繪畫在內的「歐山米水帖」也毫無疑問地，表現了此次世界一周會折射在御船綱手心中的眞實。

平成４年（1992），倉敷市立美術館購入了該畫冊當作館中蔵品。世界一周會的記憶，也留在了御船的故鄉倉敷。